

第32回 北方領土の返還を求める都民大会 専門家講演

「海洋政策から見た北方領土」

東海大学海洋学部教授 山田吉彦先生講演録

日時 : 2014年1月28日(火) 14時00分~14時40分

場所 : フロラシオン青山

(前談：海という視点から)

ご紹介いただきました、東海大学海洋学部の山田と申します。都民でございます。大学自体は静岡にあります、あまりまじめな教員ではないと世間では思われておまして、授業のあるときだけ、静岡まで通わせていただいております。今日は北方領土の話、そして日本の国境の話、海という視点から皆様にお話させていただきたいと思っております。

お手元に配っています配布資料、一枚目をご覧ください。日本という国、北は択捉島から南は沖ノ鳥島まで実に3,020kmでございます。東は南鳥島、西は与那国島、これも距離は3,143km。日本は非常に広い国でございます。例えば、今朝の天気、東京はとても寒かったですね。午後からはだいぶ暖かくなってきました。それに対して南鳥島、あるいは沖ノ鳥島。特に沖ノ鳥島は今日の朝でも気温は28度です。熱帯です。対しまして、一番北、択捉島の気温はどれくらいかということ、おそらく-20度くらいまで(下がっている)でしょう。同じ高度、高さの場所で、同じ国内なのに気温の差が50度もある。日本という国はそれだけ自然が豊か、生態系が豊かな国であるわけであります。

とくに北方領土では、ラッコがいる、シャチがいる、イルカもいる。あるいは(陸上だと)ヒグマが当たり前のように生息している。非常に自然が豊かな場所でございます。今日はこのあと高校生が根室視察の話をしていただけると聞いています。実は私も、年に数回、根室に行くのですが、ちょうど今年の今頃、根室で寒い中、海を見ていました。海に丸いボールのようなものがプカプカ浮いているんですね。これはよく見るとアザラシでした。その横にもう少し小さい丸い球が浮いておまして、これはラッコでした。納沙布岬からでも十分に(自然の豊かさを)感じられます。

私が北方領土をはじめて見たのは二十歳のときでした。学生のころ、当時は私、経済地理学という学問を専攻しておまして、この北に興味を持ちました。実際に見てみたい、そう思って、知床半島から根室までレンタカーを借りてずっと海岸沿いに動きました。その時に、「なぜこの島に行くことができないのか。どう見ても、手に届くほどすぐ近くに見えてしまう。しかも、私達の祖先の日本人が、とても寒い、極寒の中で開拓し、そして人々が住めるようになった。その土地に今日本人が行くことができない。その原因が国際関係というだけでは私は納得できない。やはりこの島は返されるべき島である」という風に思いました。

(領海、排他的経済水域について)

今日は少し、島についての話を進めていきたいと思っております。お配りいたしました資料の2枚目、カラー刷りの日本地図がございます。この地図は皆様よくご覧いただいていると思っております。日本という国は非

常に広い国であると言われます。陸地の面積自体は国連加盟国(2011年現在193カ国)中61番目、さほど広いとはいえません。ですが領海が広いんですね。領海というのは沿岸から12海里(約22km)で、領海内は日本の主権が通用する範囲です。主権というのは、警察権や司法権、行政権が行使できる範囲で、具体的には、領海内で(外国人により)犯罪が行われた場合には、日本の警察が捜査して逮捕し、日本の法律によって裁かれる。これが領海と言います。

そしてその先には、排他的経済水域というエリアがあります。これは、最大で200海里(約370km)まで認められております。このエリアでは、大きく3つの権利が認められます。排他的経済水域とは「他国を排して、経済的な権益が認められる」海域であります。海底資源の開発や海水の利用ができます。実は海水の中には、色々な資源が入っています。例えばウランです。日本の排他的経済水域の中には、年間520万トンのウランが流れています。これは日本では技術的には実は採れるんです。量産体制に入れば採算ベースにのっかることができます。しかし、この国の原子力政策の問題で停止しています。その代わり今何をやっているかという、リチウムを採りはじめています。リチウムイオン電池のリチウムです。これが海水から取れます。リチウムは中国では存在しておりませんので、中国は今日本の技術に注視しています。海水から、リチウムを採っている。その他に、海水には金や銀もあります。そして何よりも、塩があります。そして、3つ目は漁業管轄権。海底資源の開発、海水の利用、そして漁業管轄権。大きくこの3つが排他的経済水域では認められています。

ちなみに、この地図をご覧くださいまして、実は、東京都、日本の排他的経済水域の1/3は東京都の海なんです。小笠原から南鳥島、沖ノ鳥島まで、この広い海域、実は東京都の海なんです。本来であれば、東京都の方はずっと海のことを考えていいのです。皆さんのすぐ近くに、海があるんです。私は実は、昔ずっと虎ノ門で働いておりました。虎ノ門は高いところに行くと海が見えます。東京というのは実は海と近いんですね。

(北方領土海域について)

海というのは世界に通じる道です。そして北方四島はすべて、周囲は海で囲まれております。従来の北方領土返還の議論は、すべて島の話でした。「2つでいいや」なんて無責任なことを仰る方が沢山いらっしゃいました。4つの島を返していただくのは当然の話ですが、ただ、島を返していただくだけではなく、これからの視点は、島から広がる海を取り戻していかなければいけない。そこには、水産資源がある。鉱物資源もあるかもしれない。何よりも、豊かな自然が北方海域には残っているんです。

私の紹介略歴チラシに記載もありますが、5回ほどビザなし交流で北方領土に行かせていただきました。行く際には色々な立場がありまして、安全保障の専門家として行く場合、海洋学の専門家として行く場合、あるいは学生たちの指導者として行く場合、色々立場を変えて北方領土に行きました。そして行く度に、海を観察していました。確実に、北方領土周辺の海は死に始めています。色丹島の穴澗湾(あなまわん)の入り江には、水産加工工場の廃液、そして工場から出てきた魚のハラワタがそのまま海に流されています。これはどうなるかという、水温が上がらないのでバクテリアが働きません。分解できないんです。そのまま沈降していくのです。そして海が死んでいくんです。同じことを、去年は国後島でも発見しました。ハラワタが浮いています。

そしてもうひとつ大きいのは、魚介類の乱獲。これは北方領土海域だけでなく、オホーツク海も含めた問題です。例えば、日本人、カニが大好きです。この時期はタラバガニなんかをよく食べます。90%以上、ロシアから輸入しています。ですが不思議なもので、日本が輸入しているタラバガニの量の15%しかロシアは漁獲の許可を出していない。言い換えると85%が密漁ガニになります。ロシアは海洋政策

というものがまだまだできない。密漁の取り締まりもまだまだできない。そんな中で、例えばタラバガニは、日本の輸入の85%が密漁ガニなのです。乱獲が進んでいるんです。中には、まだ国を売っている方がいらっしやいます。私が調べた中では、ロシアの密漁船に日本人の船長が入っています（レボ船）。日本人が指導しながらこの海域で密漁をしているというケースもあります。中には逮捕されたという人もいます。こういった状況の中で日本の海を守っていかなければいけない。私は、こういった海という視点から、北方領土問題を考えていきたいと思います。

（北極海航路）

まず、択捉島です。初夏、非常にいいところです。私は、国民みんながこの自然に触れられるようになればいいなど。夏は本当に素晴らしい。そして温泉があります。豊かな自然がまだまだ残っています。

この北方領土をめぐる情勢が今まさに変わろうとしている。そのひとつが、北極海航路です。皆さん北極海航路と言う言葉はお聞きになられたことがありますでしょうか？今世界は大きく変わろうとしています。特に海の世界、海路が大きく変化しようとしています。そのひとつに北極海航路があります。地球温暖化の影響で、昨年、北極海の氷が観測史上一番薄くなりました。かつては氷に閉ざされていた北極海が、今は7月から11月のあいだ、船が通れるようになっています。一昨年は46隻、ヨーロッパからアジアに向かって船が通りました。昨年は460隻に対してロシアが許可を出している。実際航行した隻数については、発表を待っているところですが、実際にいま、北極海に船が通るようになっています。

北極海航路にどういう意味があるかと言いますと、例えば横浜と独ハンブルグ、アジアとヨーロッパを結んだ場合、今メインになっているのはスエズ運河経由のルート、約11,000海里。これは、横浜から出て、南シナ海を突っ切って、航行の難所マラッカ海峡を横切り、インド洋に出る。そして、海賊が多発するソマリア沖を通過し、スエズ運河、そして地中海に入ってくるルートです。このルート、今は決して安全なルートではなくなっていました。昨年(2013年)、エジプトはクーデターが起きました。そしてすぐ近くにシリアがあります。シリアは戦争中です。地中海の入口、紅海近くのイエメンでは、イスラム過激派のテロが頻発しています。そして、海賊がいる。イランは、一昨年ホルムズ海峡を封鎖しようとしています。決して安全な航路ではありません。

海運業界は代替航路を欲しがっています。代替の道は何があるかという、一番使われるのは喜望峰、ケープタウンですね。これはバスコ・ダ・ガマの世界です。わざわざアフリカ大陸をずーっと回っていく。14,500海里。はるか遠いですね。次にパナマ運河。これは逆に太平洋を越えてしまう。そしてパナマ運河を越えて、大西洋に入る。12,000海里。しかもこれには、運河を越えていくのでかなり制限がかかります。そのため、俄然注目を浴びているのが、北極海航路です。6,900海里です。現在のスエズ運河の2/3の行程で行くことができる。当然時間も2/3です。ただし7月から11月という限定された期間です。現在も既に通れているんです。試験はほぼ成功している。ただ、北極海航路を通る場合は問題点があります。地図をご覧くださいなのですが、ほとんどロシアの管轄地域を航行しなければいけない。ということは、夏の間はロシアに海路の生命線を握られるということになる。当然いまはまだ氷が溶けきったわけではないので、常にロシアの原子力砕氷船と契約を結び、もしもの時には助けてもらう、という契約を結ばなければいけない。そのため多少経費がかかります。まだ航路開発段階です。ただ昨年、ロシアの当局は、日本で説明会を開きました。そこで、スエズ運河経由の経費の8割以内に抑えるということをロシアは言っています。となると夏の間は俄然この航路が有効になってくる。

そうすると、実は北方領土問題も大きく変わるんです。影響を受けるんです。何故か。今この図はあえて横浜を基点にしています。北極海航路は当然、北海道の方が近い。しかもこの航路はおおよそロシア

が握ります。ロシアは、アジア中の荷物をウラジオストックに集めようとしている。日本海を横切って、北極海航路に繋ぐ。通過するルートは2つしかありません。宗谷海峡から北方領土海域。もうひとつは津軽海峡。この2つはこれから世界の主要海路になると思います。もうすでに、津軽海峡を通過する船舶はかなり多い。それは中国、あるいは韓国の釜山から出てきた船は、アメリカを目指すとき、津軽海峡を通ります。今は大型のコンテナ船が頻繁に通るようになってきました。ここでは昨年も、マグロ漁船と衝突事故を起こしています。次に脚光を浴びるのは北方領土海域です。この海域は中国も非常に注目しています。何故か。この数年、横浜も神戸も、世界のハブポート、中枢港湾だったのが、みんな中国に取られてしまいました。上海や青島、大連、あるいは廈門（アモイ）。それがなぜ取られたかという、地理的に、ヨーロッパよりも近い位置にあったからです。今度は、夏の間だけ日本の港が先に来ることになります。ウラジオストックが先に来るんです。中国はハブポートの機能を夏の間だけ失います。海路の流れは大きく変わります。ロシアは、アジア中の荷物をウラジオストックに集めます。また、国際的な航路の繋がりが、日本の港を使おうとしている。海のルールが根本的に変わってくる。そのとき、北方領土海域というのは、この動きの核になってきます。

択捉島と国後島の間、国後水道と言います、高田屋嘉兵衛が開発した航路です、この航路は3年程前まではほとんど貨物船は通っていません。ですが、今は頻繁に貨物船が通っています。大型の貨物船です。どこから来るかという、ウラジオストック、あるいはサハリン。択捉島と国後島の、この細い水道を通して、太平洋に出るんです。昨年、私は国後島に行かせていただきました。そのとき、まず国後の港に入る前にビックリしたのが、大型、おそらく2万トンくらいの貨物船が、洋上で給油を受けていました。国後島に石油はありません。わざわざロシアの本土から石油を運んできて、敢えて国後島で給油をさせています。税制のメリットまでつけて、実験をやっているんです。将来の北極海航路に向けて北方領土を基点のひとつに使って、というアイデアだと考えられます。ただし、この時使う港は、国後の古釜布（ふるかまづ）港ではない。これから択捉島の整備がはじまりますと、ちょうどここに鍵のように開いている入り江があります。おそらくここが対象になってくる。この入り江、単冠（ひとかつぶ）湾です。連合艦隊が真珠湾に向かう前に集まった海域（海軍第一航空艦隊（機動部隊）、1941年11月23日集結、同26日出港）です。ここは北西風を遮ることができる。そして、外洋に面している。しかも綺麗な入り江がある。おそらく今、国後島で実験的にやっている給油が、択捉島へ移っていく。海域の使い方が大きく変わってきます。

（北方領土海域で強化される海上警備）

次に、この写真を見てください。ロシアは急速に北方領土海域での海上警備を強化してきています。この写真は色丹島の国境警備庁の基地で、2011年に私が色丹島に行ったときの写真です。これは色丹島の基地、新型の巡視船が4隻います。ここに行く前に、国後島で別の巡視船を5隻確認しました。ということは全部で9隻です。北方領土海域に全部で9隻の巡視船が配備されていることになります。対して日本側はどれだけいるかという、対抗できるのは4隻です。（海上保安庁の）根室海上保安部と、羅臼の海上保安庁（羅臼海上保安署）。日本の倍以上の力で、北方領土海域の警備にあたっているんです。何故か。この船の元々の目的はオホーツク海の密漁対策に作られたものです。それが今は全部、北方領土海域で、海上安全のために振り分けられている。本格的に国後水道を使い出しているのです。

そして、国後水道にはもうひとつポイントがあります。ロシアの潜水艦の基地は、カムチャッカ半島の太平洋側と、ウラジオストック郊外にあります。この二つを結んでいるラインというのは、先ほど話した宗谷海峡と津軽海峡しかない。ただし、津軽海峡は、すべて日本の自衛隊によって通過する船舶は潜水

艦も含めて、把握されており。自由に動けるのは国後水道です。国後水道の海面下には、頻りにロシアの潜水艦が航行している。これを考えると、私は北方領土返還のポイントは国後水道にあると考えています。9隻の巡視船を配備するというのはすごい体力が必要です。中国が尖閣諸島周辺海域に出してくる警備船は、どんなに多いときでも10隻が限度です。常時9隻配備するというのはとても体力が必要です。それだけ今、ロシアは北方領土海域の海の安全の確保、治安維持に力を入れている、ということが言えます。これが、先ほど話をしました給油を受けていた船です。毎回発見されています。国後島古釜布（ふるかまっぶ）沖で大型船が給油を受けている、ということが完全に一般化されています。四島を還してもらわなければいけないのは当たり前です。二島で済むわけがない。ただし、島の状況がそれぞれ違う環境に置かれているということ、これは日本人は把握しておかなければいけないと思います。

(北方領土開発について)

次の写真は昨年古釜布（ふるかまっぶ）の街の写真です。実はこの街、今ロシアはクリル諸島社会経済発展計画で、約1,000億円かけて島の開発を行っています。ただし、国後島の開発は、作られた開発です。はっきりいって見せかけの開発だと思っています。某テレビ局が、北方領土開発についてロシアは本格的に力を入れている。夢のような世界、新しい街がどんどんできている、みたいな報道をしています。別荘で優雅に寛ぐロシア人、そんなことはありません。

今回のビザなし訪問で、その別荘地にも行きました。水が（ひかれて）ないので、住人が山に水を汲みに行って別荘まで運んでいます。それで、自分が食べるための野菜を作っているんです。それが現実です。しかも国後島は古釜布（ふるかまっぶ）一帯だけが開発されています。

そして、国後島の飛行場に行つてまいりました。午後には飛行機が着く、そして折り返して飛んでいくというのに、管制塔の中は電気が消えたままでした。そして飛行場の中は全く見せてくれない。滑走路はパネルを敷き詰めているものなんです。実態は中々見せてくれない。それでも北対協さんが色々交渉しながら、一個一個、私たちのヒントになるようなものをどうにか見せてくれました。この飛行場も見せかけのものでした。有視界飛行でしか飛べないんです。実際に管制塔は機能していない。なぜなら、この飛行場を作った建設会社は破綻してしまった。お金だけ持って消えてしまい、今係争中のはずです。

クリル諸島社会経済発展計画というのは、先ほど述べましたとおり1,000億円の計画です。択捉島に飛行場を作って、国後島に飛行場を作って、両島に12mの岸壁の港を作って、色丹島にも港や学校を作って、病院を作って、道路を作って、という計画ですが、1,000億円で何が作れるか。例えば東日本大震災で壊れた鹿島港の修復だけで600億円かかっているんです。飛行場を本格的に建設しようとしたら1,000億円はすぐ消えてしまう。港の12mの岸壁工事というのは大変な工事なんです。私は、この開発は作られたものだと思っています。そして、道路工事の開発現場の様子も見てまいりました。国後島の道路工事が行われている場所を見ますと、粉々に破碎された石の上に直接アスファルトを塗っています。水抜き基礎工事がされていない。道路に排水溝がない。案の定、雨が降ると水たまりができました。水は染み込んでいき、地中にたまり、冬になると凍り、春に解けます。国後島の道路はおそらく2年しかもたないでしょう。それに比べて、択捉島は基礎工事をやっています。状況が違うんです。

国後島に新しい教会ができました。一箇所ごとに、ぼんぼんと壁を叩いてみました。みんな化粧板でした。見た目は綺麗ですけどね。これは国後島のクリル社会経済発展計画の中で作られた、見栄えのいい教会なんです。6,000人以上いる島民のうち、ロシア正教の協会に通う人は40人しかいない。神父さんに話を聞きました。その方は「島民は島に対して全然責任を持っていない」と仰ってました。教会に来ないということも言いたいのですが。「彼らはお金を稼ぐためだけに来ている。（本土に）帰って

く」私はそれが国後島の実態だと思っています。おそらく、島に残りたいという人は1,000人もいないでしょう。

もうひとつ、私はビザなし交流のホームビジットの時に、学校の先生と話をしました。特に郷土史の先生方です。私はダイレクトに「皆さんがこの島にいるのはなぜなんですか。どうして日本人が開拓した島に皆さんはいるんですか。どう教えているんですか」という質問をしました。彼らは簡単に答えました。戦争の結果だと。彼らにはカイロ宣言（1943年、カイロ会談にて、連合国の対日方針等）なんて関係ないんです。力で奪った土地であると。しかも彼らは終戦の日は9月2日だと言い切ります。私達が武装解除した8月15日ではなく。その間に入って全部奪ってしまいました。彼らはそれを徹底して教育しているんです。誰も疑問に感じない。戦争の結果奪った土地で、我々の戦利品だ、という認識なんです。それをどうやったら変えていけるのか。

島にはひとつひとつ特徴があります。例えば択捉島はギドロストロイ（水産加工会社）帝国と呼ばれます。ギドロストロイという民間企業が、全てを仕切っている。クリル諸島社会経済発展計画のうち、択捉島にはおそらく400億円くらいは入っているでしょう。資材の運搬も、労働者の確保も、現地の工事も、全てギドロストロイ系の会社が請け負っています。島の中で、ギドロストロイの中でお金がぐるぐる回っています。ギドロストロイは病院を作るときにも寄付をします。択捉島にいてもサハリンの大学に通った資格を取れる通信教育プログラムを用意しています。ロシア正教の教会にも寄付をして、建物を新築しています。経済、教育、そして健康。すべてギドロストロイが影響力を持つようになっています。もう利権がガチガチなんです。

（北方領土と極東開発）

まず国後島までは返ってきます。ポイントは択捉島の取り返し方だと私は考えています。経済で取り返すんです。ギドロストロイが入っているというのは、これは逆に有利なんです。相手はお金であり、ビジネスです。いつまでもモスクワから来るお金だけをぐるぐる回しても、ギドロストロイには明日はない。経済の発展はない。そうすると、もっとも近い日本に頼るしかない。更に言うと、ロシア経済自体もそうなんです。プーチンは東を見ている。極東開発、これはプーチンの生命線で、天然ガス開発です。ガスは誰が買ってくれるでしょう。よく、「ロシアからガスの安定供給を受けるほうが得だ」という考え方がありますが、これは違います。ロシアは日本に買ってもらうしかない。今ロシアは焦っています。なぜか。天然ガスが先行き不安になってきている。これはシェールガス革命が起きているものがあります。また日本は投資さえすれば海底からメタンハイドレードを取ることができます。

まずシェールガスについては、高値に設定されているLNGの価格が崩壊します。プーチン政権が享受するはずの利益がなくなってしまう。桁違いの金額です。どうにかするためには、ロシアはもっと天然ガスを液化する、液化天然ガスのプラントを作らなければいけない。これは1兆円かかります。今、ロシアの企業はどうやって1兆円調達できるのでしょうか。また、2月、ソチに安倍総理が行きます。プーチンと話すでしょう。おそらく、日露平和条約は少しずつでも進みます。ただ、この実態は何かというと、経済条約でしょう。日本の底堅い、力強い経済からロシアが恩恵を受けるための条約となるでしょう。日本のマーケットでロシアの企業が上場する。資金調達をする。そして日本市場の裏書があって、はじめて国際的な金融機関からロシアは金を借りることができる。そうして、極東開発が進むんです。逆に言うと、日本の協力なくしては極東開発はできない、それくらいわかっています。

(結び：海を守る)

となると、今は動き始める時期なんです。そのときに威厳を忘れない。為すべきことをしっかりと把握しておく、それが重要だと思います。北対協の皆様をはじめ、色々な人がいます。見方はみんな違います。我々研究者、或いは外務省のOBの方。それを聞いていって実際の姿は何か、ということ把握していくことが重要です。今はそれをするべき時期です。既存の概念にとらわれず現実を見ていく。そのためにはサハリンも見なければいけない、そして北方四島を見ていく。そして何をすべきなのか考える。私は、いま海にポイントがあると思っています。北極海航路、天然ガスの輸送、そして、サハリンのパートナーとしての北方領土の扱い。かつては軍事拠点としての北方領土に意味がありました。ただ今はロシアは北海道に上陸して攻めていくような体制はとっていない。となると、私たちも違う見方をしていなければいけない。軍事よりもむしろ、海上安全保障や潜水艦の動き、ということになってきます。しっかりと海の安全を確保しながら、そして、これから先どのような交渉をして行くのか。その時の視野は、海にある。

私の立場から言いますと、四島の交渉は長引きます。まず先に海から返してもらおう。彼らは、先ほども言いましたように、漁場の管理もできないし、環境も守れないんです。航行安全は、無理をして9隻も警備船を配置しなければいけないんです。それは世界一得意な国が近くにあるんです。世界一航行安全を守ることがうまくて、漁船の取締りができて、海洋環境保全の上手な国があります。北方領土海域の海は日本が守るべきです。実はこれ、条約がいりません。海上保安庁とロシアの国境警備庁との協定でいいんです。すでにある協定を延長していけばいいんです。海を守るのはまず日本がやります。しっかりと海を日本が管理していく。そうしないと手遅れになります。サケもサンマもカニもみんな取り尽くされてしまいます。将来を考えて計画的に環境を守っていかなければいけない。気付いたらラッコもいなくなってしまうかもしれない。しっかりと海を守る体制、まずは、海を取り返す。

この話、実は安倍総理に話したことがあります。その中に、日露海上警備協定の見直し、という話が入ってます。ここまではいかないにしても、海の安全が両国が協力しながらしっかりと守っていく、ということになっていくでしょう。そのときに、北方領土海域における日本の影響力はますます強くなっていく。まずは影響力を持つことが何よりだと思います。今のままほっておいたのでは何もできません。私はすぐにでも動くべきだと思います。

何よりも心配なのは、私は北方領土の研究者の中で若手だと言われます。でももう51歳です。若い人たちに、もっともっと伝えていかなければいけない。うちの学生、海洋学部の学生なのに3年生に国境線をひかせたら3%しか答えられなかったんです。1年生は15%答えられたんですが(笑)。これは日本全体的に国境意識が芽生えてきたということではないかと思います。若い人たちにも今の現状をできるだけ勉強してもらわないといけない。何よりも、我々日本人の北方領土を返してもらいたいという気持ちが薄らいできてしまうと、政府が頑張っても、内閣府や外務省が頑張っても、頑張りきることができなくなってしまいます。何よりも、私達一人ひとりが周りの人たちに、この北方領土のことを語っていく、そして家族にも語っていく。できるだけ多くの人が根室に行って、すぐ近くの島が取られたままだということを見ていただきたいと思います。

今日は海の視点から北方領土のことを話させていただきました。ご清聴ありがとうございました。